広報ひこね 通巻第1254号
（平成23年10月15日発行）

発行：彦根市〒522-8501 滋賀県彦根市元町4番2号 ☎0749-22-1411㈹ FAX 0749-22-1398
編集：情報政策課 ●1日・15日発行 彦根市ホームページ http://www.city.hikone.shiga.jp/

彦根市では、点字および音声版広報ひこね（編集版）を発行しています。問い合わせ先：㈹障害福祉課☎27-9981、FAX26-1767。また、外国語版（英語、中国語、ポルトガル語）の広報ひこね（編集版）も発行しています。問い合わせ先：㈹人権政策課☎30-6115、FAX24-8577

連載企画 －わたしの町の戦国 第16回－

本庄城 －本庄氏ゆかりの平地城館－

愛知川の流路変更

現在の愛知川は、服部町の北辺で屈曲して、北から西へと流れを大きく変えていますが、屈曲する地点をそのまま北へ延長した彦富町・出路町・田原町・上岡部町・上西川町・下西川町・甲崎町そして湖岸の薩摩町へと伸びるルートが、かつての愛知川の本流でした。愛知川がもたらした土砂によって少し高くなっており、現在は、その上に各集落が帯状に形成されています。

注目したいのは、このルートを境にして条里地割（※）に食い違いが生じている点です。一方で現在の愛知川を境に右岸と左岸で条里地割に食い違いは認められません。当地に条里制が施行された頃、旧愛知川の本流は先述のルートに沿って流れており、当時の愛知郡と神崎郡の郡境も旧愛知川に沿ったものでした。

では、いつ頃、愛知川の流路は変更となったのでしょう。文献資料などの検討から、その時期は比較的新しく、16世紀頃と推定されています。大規模な洪水が原因だったのでしょう。

栗見荘

愛知川の流路が変更となる以前、本庄とその周辺一帯には、栗見荘という比叡山延暦寺が領する荘園が広がっていました。栗見荘は、富永荘（長浜市高月町・木之本町）・木津荘（高島市新旭町）とともに「三箇荘聖供領（千僧供領）」と呼ばれ、延暦寺の重要な経済的基盤を担う特別な荘園でした。

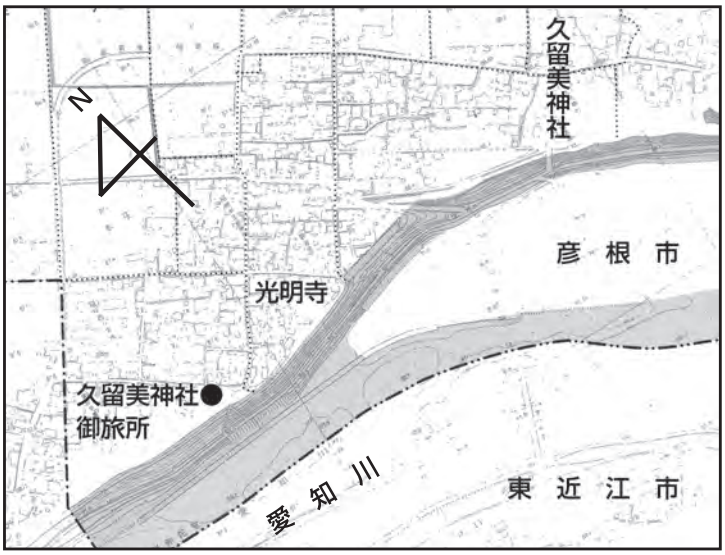
栗見荘は、現在の彦根市域に属する本庄村・田附村・新海村と、東近江市域の新村・宮西村・乙女浜村・福堂村・小川村・川南村・阿弥陀堂村の10村で構成されていたと考えられ、江戸時代には「栗見荘十郷」とも呼ばれました。本庄町の久留美神社に所蔵されている「栗見之庄由来之事」（応永4年：1792）によれば、栗見荘十郷の祭礼で日吉山王7社の神輿が4月に7日7夜の神事を行なっていたと記しています。愛知川の流路が変わり荘域が分断されても、栗見荘の伝統は長く続いていたのです。

こうした栗見荘十郷の中で本庄村は「栗見庄の本なり、故に本荘の名ありき」（『近江輿地志略』）と記されるように、栗見荘の中心的な位置を占めていました。

本庄氏と本庄城

この本庄の地に城館を構えたのが本庄氏でした。本庄氏は、もともと栗見荘の現地管理を延暦寺から委ねられた荘官であったと推測されますが、しだいに本庄を本拠として武士化し、城館を築くようになったと考えられます。

本庄氏が文献に登場する初例は、室町時代前期、本庄次郎左衛門満宗なる人物です。以後、代々が六角氏に仕えました。戦国時代の末には、本庄孫次郎とその子與太郎が知られます。與太郎は名を将監と改め、六角氏の有力な家臣として活躍しましたが、六角氏の滅亡後は秀吉に仕え、秀吉が天下人になると、彼の命により福島正則の重臣として5,000石を領しました。関ヶ原の合戦後に福島家が断絶すると、久留米（福岡県）に赴き、久留米藩主有馬氏に仕えたようです。



▲本庄町地図

本庄氏の城館の位置は、愛知川の流路変更に伴う混乱が影響しているのか、明確ではありません。地元では、将監が願寺として建立したと伝える光明寺や久留美神社御旅所一帯に城館が存在したと伝えています。

※ 古代から中世に行われた土地区画

問い合わせ先 ㈹教育委員会文化財課☎26-5833番、FAX26-5899番、Eメール：bunkazai@mx.hikone.ed.jp

今月の納税 市県民税（第3期） 10月31日㈪までに納めましょう

VEGETABLE OIL INK
▶「広報ひこね」は大豆油インキを包含した植物油インキを使用しています。
▶廃棄する場合には古紙回収に出してください。
▶この「広報ひこね」は48,960部作成し、1部当たりの単価は7円（1円未満切り捨て）です。ただし、原稿作成・編集などにかかる職員の人件費は含まれていません。